

# 稲荷山古墳出土の須恵器

—平成9年度発掘資料—

宮 昌 之

**要旨** 平成9年度に実施した国指定史跡埼玉古墳群中の稲荷山古墳の整備事業に伴う発掘調査において、墳丘造出し付近の周堀を中心に多くの埴輪片とともに須恵器と土師器が出土した。特に須恵器は、昭和13年の前方部土取りの際に採集された資料以外に、ほとんど発見されていなかった。今回の調査では、新たに発見された器種があるとともに、採集されていた資料と発掘資料が、約60年の年月を経て接合するなど多くの成果をあげた。ここに出土した須恵器の主なものを紹介する。

## 1 はじめに

稲荷山古墳は、埼玉県の北東部、JR高崎線行田駅の東方約4kmの行田市大字埼玉に所在する、国指定史跡「埼玉古墳群」中の前方後円墳である。埼玉古墳群には、円墳としては国内最大の丸墓山古墳、県内最大規模の前方後円墳である二子山古墳、千葉県富津市付近の海岸の房州石を使用した横穴式石室に、馬冑や蛇行状鉄器を初めとした大量の豪華な副葬品を出土した將軍山古墳を含め、8基の前方後円墳と1基の大形円墳が現存している。この他にも開墾によって消滅した円墳や方墳を含め、南北1km、東西500mの範囲に、30基以上の古墳が密集している<sup>1)</sup>。

稲荷山古墳は、前方部が昭和13年の土取りによって消失し、現在平坦になっている。また周堀は昭和50年に復原されたが、当時の未買収地部分の復原はおこなわれていない。これらのことから、古墳や周堀の形について見学者に少なからず誤解を与えてきた（写真1）<sup>2)</sup>。そのため埼玉県教育委員会では、平成9年度から文化庁の指導を受け、稲荷山古墳の復原整備を開始した。整備事業では破壊以前の実測図を参考に前方部を復原するとともに、不整形の周堀を改める計画である。

稲荷山古墳の整備事業に伴う報告書の作成が整備終了後になることから、平成9年度の発掘調査により出土した須恵器の一部を報告する。また、昭和13年の土取りの際に川鍋重寿氏が採取し、これまで伝稲荷山古墳出土須恵器とされていた須恵器についても比較するための参考として図を再掲載した<sup>3)</sup>。大方のご意見、ご教示を承り、今後の整備事業に備えたいと思う。

## 2 稲荷山古墳の概況

稲荷山古墳の名称は、明治40年刊行の「北武八志」四ノ巻墳墓志上に初めて現れる。当時は「曾根塚」ともよばれ、昭和11年発刊の「史蹟埼玉」には「田山」とも呼ばれていたと記されている。規模的には小さい「將軍山古墳」や同規模の「鉄砲山古墳」が、19世紀初めの「武蔵志」や「新編武蔵風土記稿」等に見られるのに対してかなり遅い<sup>4)</sup>。



第1図 埼玉古墳群古墳分布図 (●現存、○消滅)

第1表 埼玉古墳群古墳一覧

番号	古墳名	墳形	規模m	埋葬施設	備考
1	稲荷山古墳	前方後円墳	120	礫郭・粘土郭	二重周堀
2	丸墓山古墳	円墳	105	不明	裾に葺石
3	二子山古墳	前方後円墳	138	不明	二重堀
4	將軍山古墳	前方後円墳	90	横穴式石室他	二重周堀・房州石
5	愛宕山古墳	前方後円墳	53	不明	二重周堀
6	瓦塚古墳	前方後円墳	73	不明	二重周堀
7	鉄砲山古墳	前方後円墳	109	不明	二重周堀
8	奥の山古墳	前方後円墳	66.5	不明	二重周堀
9	中の山古墳	前方後円墳	79	横穴式石室?	須恵質埴輪壺
10	浅間塚古墳	前方後円墳	58	不明	周堀・前玉神社
11	戸場口山古墳	方墳	40	不明	二重周堀・墳丘無
12	天王山古墳	円墳	27	不明	周堀・埼玉1号墳
13	梅塚古墳	円墳	23.5	不明	周堀・埼玉2号墳
14	埼玉3号墳	円墳	12.5	不明	周堀
15	埼玉4号墳	円墳	17.5	不明	周堀
16	埼玉5号墳	円墳	26	不明	周堀
17	埼玉6号墳	円墳	22	不明	周堀
18	埼玉7号墳	円墳	21	不明	周堀
19	No.72古墳	円墳	24	不明	航空写真判読
20	No.73古墳	円墳	24	不明	航空写真判読
21	No.74古墳	円墳	24	不明	航空写真判読
22	No.75古墳	円墳	20	不明	航空写真判読
23	山宮山古墳	円墳	不明	不明	
24	白山古墳	円墳	50	横穴式石室	白山神社
25	白山2号墳	円墳	15	不明	
26	No.76古墳	円墳	13	不明	航空写真判読
27	No.77古墳	円墳	12.5	不明	航空写真判読
28	No.78古墳	円墳	13	不明	航空写真判読
29	毘沙門様古墳	円墳	不明	不明	
30	No.81古墳	円墳	不明	不明	
31	No.82古墳	円墳	不明	不明	
32	愛宕山古墳	円墳	30	不明	周堀
33	神明山古墳	円墳	19	不明	

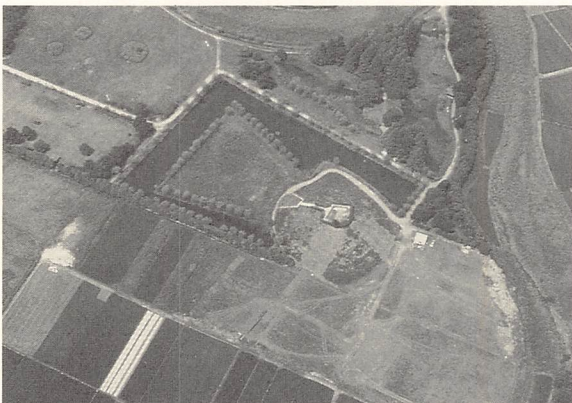


写真1 上空から見た稲荷山古墳

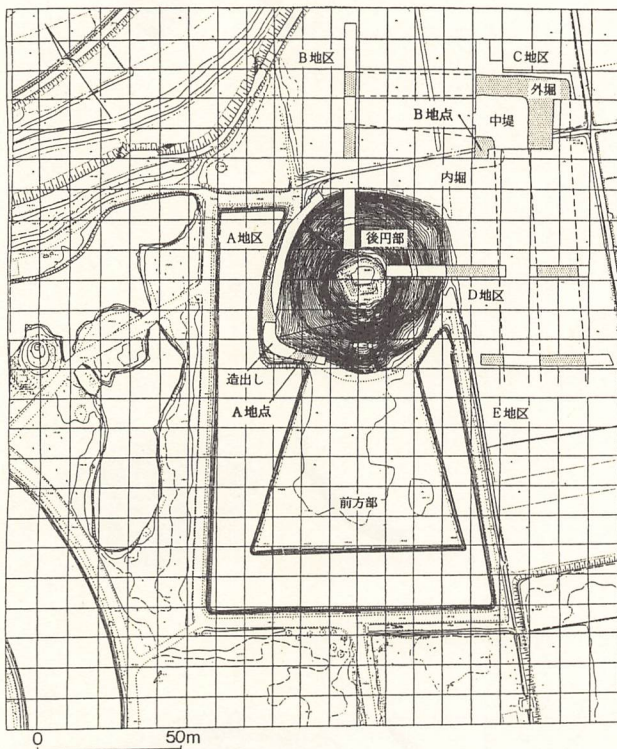
昭和13年に国指定となった埼玉古墳群であったが、昭和42年・43年に「さきたま風土記の丘」建設事業が実施された。併せて埋葬施設の確認と出土品の展示を目的として稲荷山古墳が発掘された。

昭和43年には墳丘及び内部主体の調査が行われ、後円部頂上から礫郭と粘土郭の二つの埋葬施設が発見された。

礫郭からの出土遺物は、115文字の金象嵌銘



写真2 昭和44年2月撮影航空写真



第2図 平成9年度調査区域及び須恵器出土地点

### 3 平成9年度出土須恵器

- 1 有蓋脚付短頸壺〔蓋部〕口径5.9cm、摘径2.4cm、器高4.1cm。偏平で中央がくぼむつまみを付ける。へら削りを施した部分（天井部中央寄り2/3）と口縁部側の回転などで部分との境に明瞭な段を残す。へら削り部分はずまみの接合のため大部分がなでられている。天井部と口縁部の境の稜は鋭く尖り、稜の下に釉がたまる。ろくろ右回転。口縁部は僅かに内側に傾く。口縁内面の器壁が端部側3mmが薄くなり、段になる。内外面に僅かに自然釉が付着する。

で知られる金錯銘鉄剣<sup>5)</sup>・剣・直刀・鉾・刀子・鉄鏃・挂甲等の武具、環状乳画文帯神獸鏡・硬玉製勾玉・銀環・帯金具等の装身具、轡・壺鐙・鞍・鈴杏葉・三環鈴・雲珠・辻金具等の馬具、鉄鉗・鉄鎌・鉄斧・鑿子・砥石等の工具がある。

粘土槨はすでに盗掘され、剣・直刀・鉄鏃・挂甲・轡・辻金具・鎌等の破片が僅かに出土した。これら埋葬施設からの出土遺物は現在「武蔵埼玉稲荷山古墳出土品」として国宝に指定されている。

また、同じ頃撮影された航空写真（写真2）には、墳丘・周堀・中堤の位置が濃淡で判明し、長方形の周堀が映し出されていた。古墳周辺は1m以上土取りされており、遺構確認面まで数cm程である<sup>6)</sup>。そのため、堀と中堤直上の地表面の乾燥度の違い等により、航空写真にその位置が写ったと考えられる。

航空写真と墳丘の平面形から、前方後方墳の可能性も指摘されたが、昭和48年の周堀調査で後円部の裾が円形に巡り、前方後円墳であることが確認された。周堀の調査では巫女・武人・人物・弾琴・家形・盾形・馬形・猪形・円筒・朝顔形円筒等の埴輪、須恵器甕、土師器坏と甕が出土している。

その後、部分的な補修工事や埋葬施設のレプリカ設置、階段施設工事等が実施されていた。

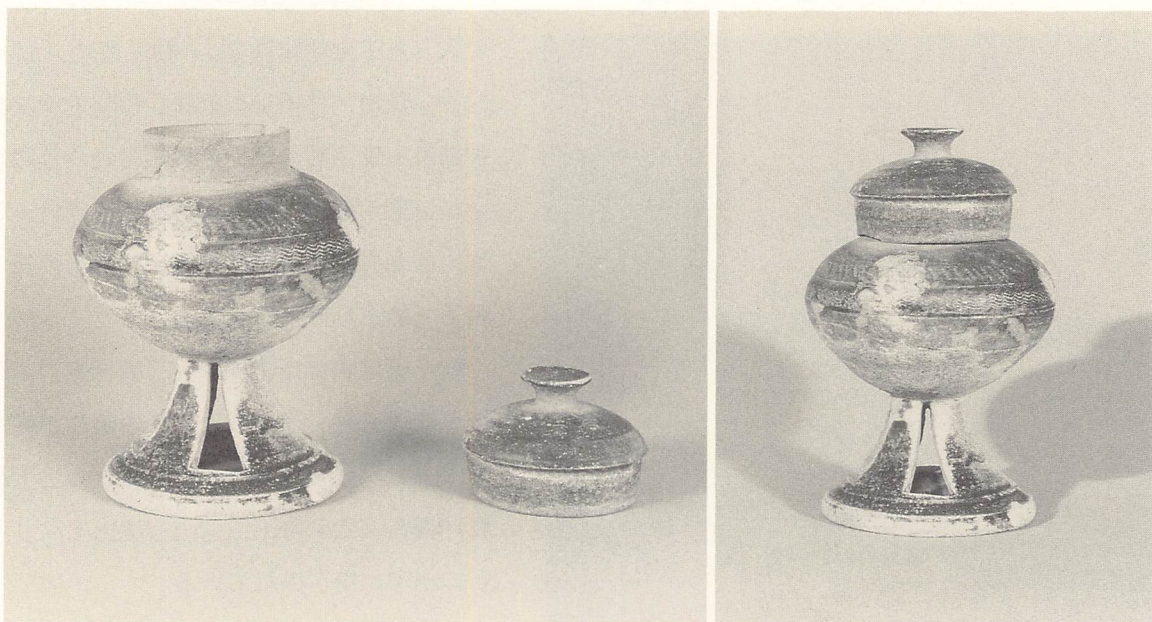
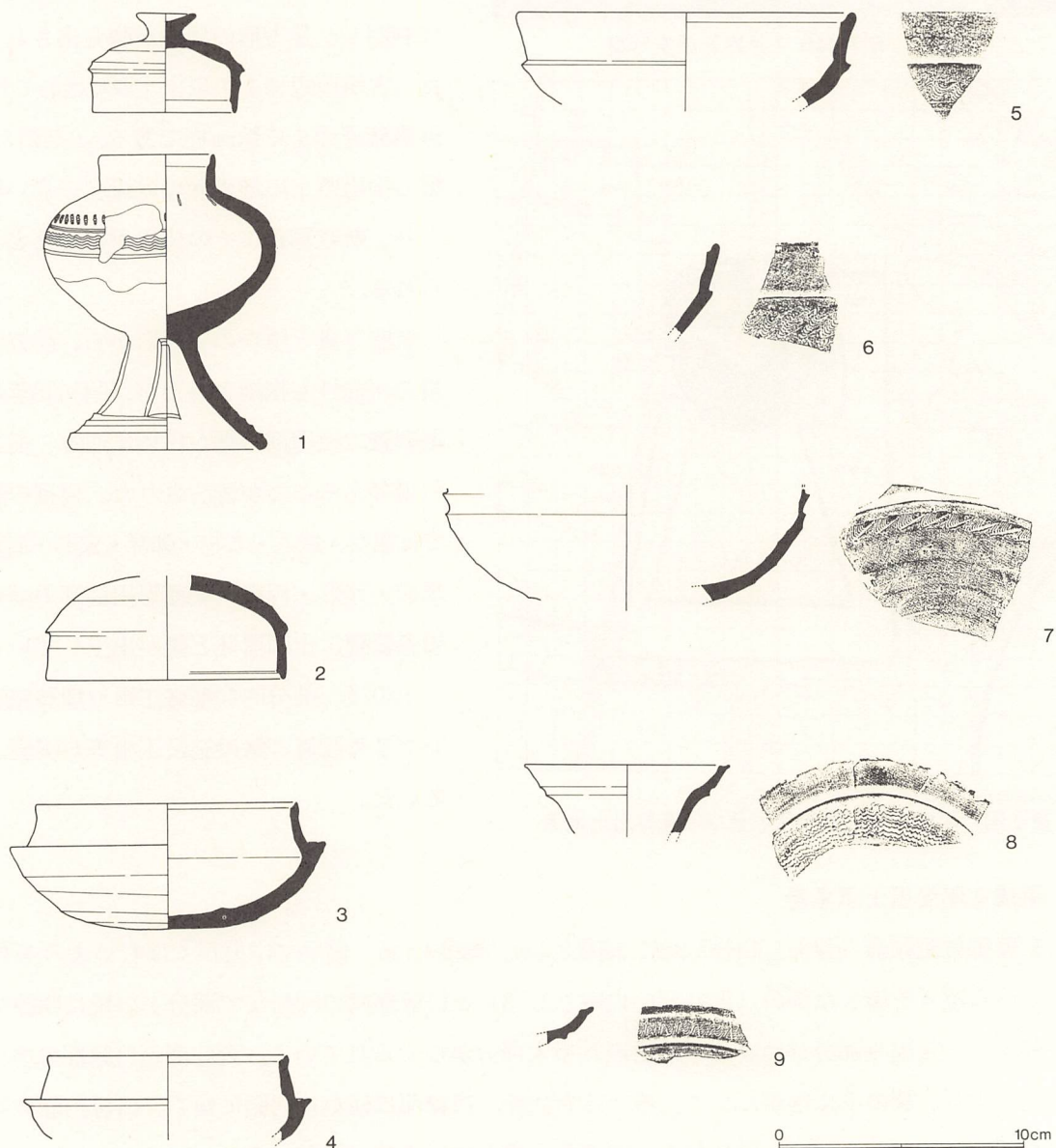


写真3 有蓋脚付短頸壺



第3図 平成9年度出土須恵器

- [壺部] 口径4.9cm、胴径9.5cm、脚径8.2cm、口縁部高1.5cm、脚高4.7cm、器高12.2cm、最大径は体部のやや上方にあり、口縁部は体部から直立して立ち上がり、端部の近くで僅かに外反する。口縁端部内面の器壁が端部側4mm程が薄くなり段になる。2以降の遺物の口縁端部内側も同様に段になるが、他は器壁の薄い部分の高さが狭い。体部上半には2条の沈線がめぐり、その間には一単位4本の櫛描波状文を施す。体部口縁部寄りには、右下がりの櫛状工具による刺突文を間隔を置いて一周させる。蓋とセットで焼成されたため蓋の一部が壺部に付着している。体部上半には僅かに自然釉が付着し、沈線の直下にも釉が付着する。脚の壺部との接合部分は細く、壺底はやや粗くなでられている。脚は大きく開き、裾部で僅かに下方へ向く、外面裾部には明瞭な3本の沈線(2本の凸線)を付け、台形の透かし孔が4方向に一段穿かれている。透かし孔に面取りは無く、切り込み線は壺部へ及ばない。外面には煤けた色調の部分に連続して釉が付着する。胎土は白色粒を含む。外面がすすけ、色調は暗灰色(N3/-)~灰白(10Y7/1、N6/-、N7/-)。<sub>n</sub>。焼成は良好だが、壺下半は外面が荒れる。墳丘造出しと前方部に挟まれた内堀(A地点)から出土。
- 2 坏蓋 推定口径9.8cm、残存高4.4cm。口縁端部内面の器壁が薄くなるため、段になる。天井部は3/5に、ろくろ左回転の篋削りを施す。他は回転ナデ調整。胎土は砂粒、白色粒を含み、やや粗い。色調は灰色(N6/-)。焼成は良好。天井部と口縁部の境の稜はやや鋭い。口縁部1/9、天井部1/5残存。A地点出土。
- 3 坏 口径10.8cm、受け部径13.0cm、器高5.1cm、底部外面4/5を篋削り、他は回転ナデ調整。口縁部立ち上がりは外反し、端部は内傾し、凹面をなす。端部は鋭く尖る。胎土は砂粒を含み、やや粗い。色調は灰色(N6/-)。焼成は良好。1/2残存。A地点出土。
- 4 坏 受け部径12.0cm、口縁部立ち上がりは僅かに外反し、端部は内傾し、凹面をなす。3ほど先端部は鋭くない。胎土は砂粒を含み、やや緻密。色調は灰色(N6/-)。焼成は良好。底部欠、受け部1/4、口縁部1/10残存。ロクロ回転方向不明。A地点出土。
- 5 無蓋高杯 口縁部は斜め上方に立ち上がる。推定口径14.0cm、口縁端部内面の器壁が薄くくぼむ段になるが、製品全体に厚みがあり先端部は丸くなる。坏部外面には、一単位8本の櫛描波状文を施す。色調は灰色(N6/-)、胎土の色調は紫灰色(5RP6/1)。胎土は緻密。焼成は堅緻、1/10残存、ロクロ回転方向不明。後円部東側内堀の中堤側(B地点)から出土。
- 6 無蓋高杯 口縁部は肥厚しながら斜め上方に立ち上がる。小破片のため径は不明。口縁端部内面の器壁が薄くなるため段をもつが、先端部は緩やかに尖る。坏部外面には一単位8本の櫛描波状文を施す。色調は灰色(N6/-)。胎土は緻密。焼成は堅緻。5に類似するが、櫛描波状文や器壁の厚みが僅かに異なる。B地点出土。
- 7 無蓋高杯 全体の形状は不明だが、体部外面に一単位7本の櫛描波状文を施す。外面に凸線が2段みられ、上の段より上方の器壁が薄く、1mmに満たない。内面には成形時の凹凸残る。坏部外面約1/2を回転篋削り。他は回転ナデ調整。色調は灰色(N5/-)、胎土には砂粒・白色粒を含み、やや緻密。焼成は堅緻。A地点出土。
- 8 甗 推定口径8.4cm、頸部には一単位8本の櫛描波状文を施すが波形が一定しない。頸部から凸線を境に口縁部となる。凸線から口縁部への移行部分に緩やかな窪みがある。口縁端部は内傾

し、凹面をなす。外面はくすべて黒色(N2/-)、内面は釉が掛かるが、あばた状に器面が荒れザラザラ。胎土は色調が灰色(10Y6/1)で緻密。焼成は堅緻。A地点出土。

- 9 甗 推定口径14.0cm、大きく外反する口縁部は、端部内面の器壁が薄く、自然釉の影響もあり、ゆるやかな段になる。口縁部外面には一単位10本の櫛描波状文を施す。内面には自然釉がかかる。色調は外面黒褐色(7.5YR3/1)、内面暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)。胎土は緻密。焼成は堅緻。A地点出土。

昭和13年の資料を含めて出土した須恵器をみると、胎土・焼成の違いから複数の生産地から持ち込まれているようすがうかがえる。生産地の判定は視覚的な判断では困難で、科学的な方法を加えて判断する必要があるが、胎土が洗練され緻密で、焼成が硬質なため重量感もある、陶器窯の製品の可能性も考えられるもの。胎土が粗く含有する粒子が器面に噴出し、やや軽い、陶器窯の可能性の低い製品。胎土が上質で器形や成形・整形の特徴から愛知県東山窯の可能性のあるものに大まかに区分できよう。

#### 4 稲荷山古墳出土須恵器の型式と年代

かつて『埼玉稲荷山古墳』で報告した「伝稲荷山古墳出土の須恵器」について、多くの研究者が様々な検討を加えている。まず、これらの須恵器が須恵器編年上どこに位置づけられているのか、主な文献の記述部分を抜き出してみる。(下線は筆者傍線)

金子眞土氏 「甗・蓋杯にやや古式の様相をみとめる他、高杯蓋・高杯は細部で異なる部分を持つ。…(中略)…あえて時間差を問題にするほどの違いはなく、同時期の所産とすべきであろう。現在の知見ではTK二三型式(陶器I-4期)に比定することが妥当であるが、I期後半の円蓋高杯についての資料が僅少である。」<sup>9)</sup>

田辺昭三氏 「二つの主体部をもっているので、いずれの主体部に属するかは決定し難いが、その須恵器は高蔵47号型式の中でもやや古い形式的特徴をもっている。」<sup>9)</sup>

中村 浩氏 「少なくとも2段階の時期差があるものが認められ、従来いわれているよりは古く遡るものも見られることを確認した。さらに辛亥年を471年とすると、その年代に相当するものはI型式4段階の時期に遡る一群と考えた。」<sup>10)</sup>

坂本和俊氏 「括れ部付近から出土したと伝えられるTK23型式からTK47型式に変わる時期の多量の須恵器は、副葬品の内容からみて礫礮に伴うものと想定する。」<sup>11)</sup>

安村俊史氏 「田辺氏の型式に当てはめるとTK23型式と考えてもいいのではないかと考えている。稲荷山古墳出土須恵器をTK47型式と断定した記述をしばしば見かけるが、田辺氏はTK47型式の中でも古い特徴を指摘しているのであり、TK23型式からTK47型式にかけての時期にあたることに留意しておく必要があるのではないかと思う。」<sup>12)</sup>

白石太一郎氏 「このうち須恵器は肉眼観察では大阪府陶器窯跡群のものと同断される。田辺昭三氏の型式編年ではTK47型式に近い。一部の有蓋高杯にはTK23型式とすべきものも含まれるが、大部分の有蓋高杯は、蓋・杯部とも天井部・底部が丸みを増し、口径に比べて高く、深い。全体

としてTK47型式でも古い段階に位置づけて大過なからう。」<sup>13)</sup>

この他、都出比呂志氏、駒宮史朗氏、橋本博文氏は「TK47型式」と述べている。<sup>14)</sup> また、稲田晃氏は、陶邑窯跡群との比較ではないが、「久居2号窯出土の甕破片を実見した結果、両者は瓜二つと言ってよく、稲荷山古墳の甕が久居2号窯の製品であることには一片の疑いもないことが分かった。」として三重県久居市久居2号窯の製品と断定している。<sup>15)</sup>

このように同一の資料について、「TK23型式」、「TK23型式の時期に遡るものとTK47型式の両方」、「TK23型式からTK47型式に変わる時期」「TK47型式の古式」「TK47型式」とする様々な考えが出されている。

次に年代について記述している部分を要約してみる。稲荷山古墳の礫槲からは、実年代資料として、辛亥年銘の記された鉄剣が出土しているが、礫槲・鉄剣銘文・須恵器の三者の共伴関係の考え方の違いから、同じ型式であっても存続時期の一致をみていない。

須恵器の編年研究は、田辺昭三氏、中村浩氏によって進められ、その編年に照らし合わせることで、時期的な位置づけが試みられてきた。辛亥年銘の発見は、実年代の想定に少なからず影響を与えたようで、当該時期の型式は、発見される以前と若干異なっている。

田辺昭三氏は、TK23型式とTK47型式の間に西暦500年の年代を与えている。出土須恵器の年代を西暦500年を僅かに下った位置に置いている。<sup>16)</sup>

中村浩氏は、金錯銘鉄剣発見以前は、I型式4段階・5段階を6世紀前半の前後を僅かに含めた時期に置いていた<sup>17)</sup>が、発見後はI型式4段階を5世紀末とし、I型式5段階との間に西暦500年をあてている。<sup>18)</sup>

後藤建一氏は、直接ではないが、湖西編年と田辺・中村両氏の編年と対比させることで、年代について述べ、TK47型式・I型式4段階に5世紀の第4四半期（その後の後藤氏の論文でこの期に471年を置いている<sup>19)</sup>）を、次段階に5世紀末から6世紀第1四半期の年代を与えた。

藤原学氏は、鉄剣銘文からI-4・5段階を5世紀最末期（西暦500年頃）～6世紀極初頭とする実年代を支持するとし、稲荷山古墳の須恵器を西暦500年頃にあてている。<sup>20)</sup>

都出比呂志氏は、稲荷山古墳造営を471年以後とし、TK47型式に471年以後20～30年の幅の年代を与えた。<sup>21)</sup>

坂本和俊氏は、鉄剣が製作されてから埋葬されるまでの期間を30年と想定し、礫槲への埋葬を500年前後と考え、須恵器がTK23型式からTK47型式に移行する時期であることから、TK23型式を480～500年、TK47型式を500～520年と考えた。<sup>22)</sup>

小沢洋氏は、TK23型式からTK47型式の年代を5世紀末葉～6世紀初頭(580～600)に位置づけた。<sup>23)</sup>

天野末喜氏は、稲荷山古墳出土須恵器の型式をTK23型式・TK47型式と判断し、鉄剣の埋納までの期間を考慮して5世紀の第IV四半期に含まれるとみなした。<sup>24)</sup>

斉藤孝正氏は、猿投窯との対比を行い、陶邑窯I型式第4段階と猿投窯第I期第4小期（城山-2）を、I型式第5段階と猿投窯第I期第5小期（H-11）とし、第5小期の終わりに西暦500年を入れた。<sup>25)</sup>

白石太一郎氏は、辛亥年銘の鉄剣を出土した礫塚は、鈴杏葉の年代からMT15型式の古い段階の須恵器が伴うはずで、出土した須恵器は未発見の中心主体の埋葬に伴う遺物と考えている。生前入手した剣を490年から500年頃に埋葬した時に副葬したと考え、TK47型式を5世紀の第4四半期を中心とすると頃、MT15型式を5世紀末から6世紀第1四半期にかけての頃と想定された。<sup>26)</sup>

山田邦和氏は、田辺昭三氏・中村浩氏の編年序列を継承し、I後期古段階（高蔵寺23号窯式）と新段階（高蔵寺47号窯式）にわけ、新段階の初頭に500年を与えてる。<sup>27)</sup>

このように、同一の須恵器について、型式の異なる見解が生じ、その型式の存続時期についても諸説がある。<sup>28)</sup> これは、研究者の個人的な判断基準が異なるためなのか、酒井清治氏が指摘<sup>29)</sup>するように型式の設定が妥当なのかという問題も生じかねない。この点について論ずるほどの技量はないが、いずれにしても稲荷山古墳の埋葬施設と須恵器の相関関係が、いまだ不明瞭なまでの論述である点に、内包された問題の一つがあることは明白であり、発見されている以外の主体部について、有無の確認の必要性を痛切に感じる。<sup>30)</sup>

今回紹介した稲荷山古墳は今後も引き続き調査が実施され、接合する資料が発見される可能性も予想される。平成9年度の調査時点での見解であることを付け加えておく。

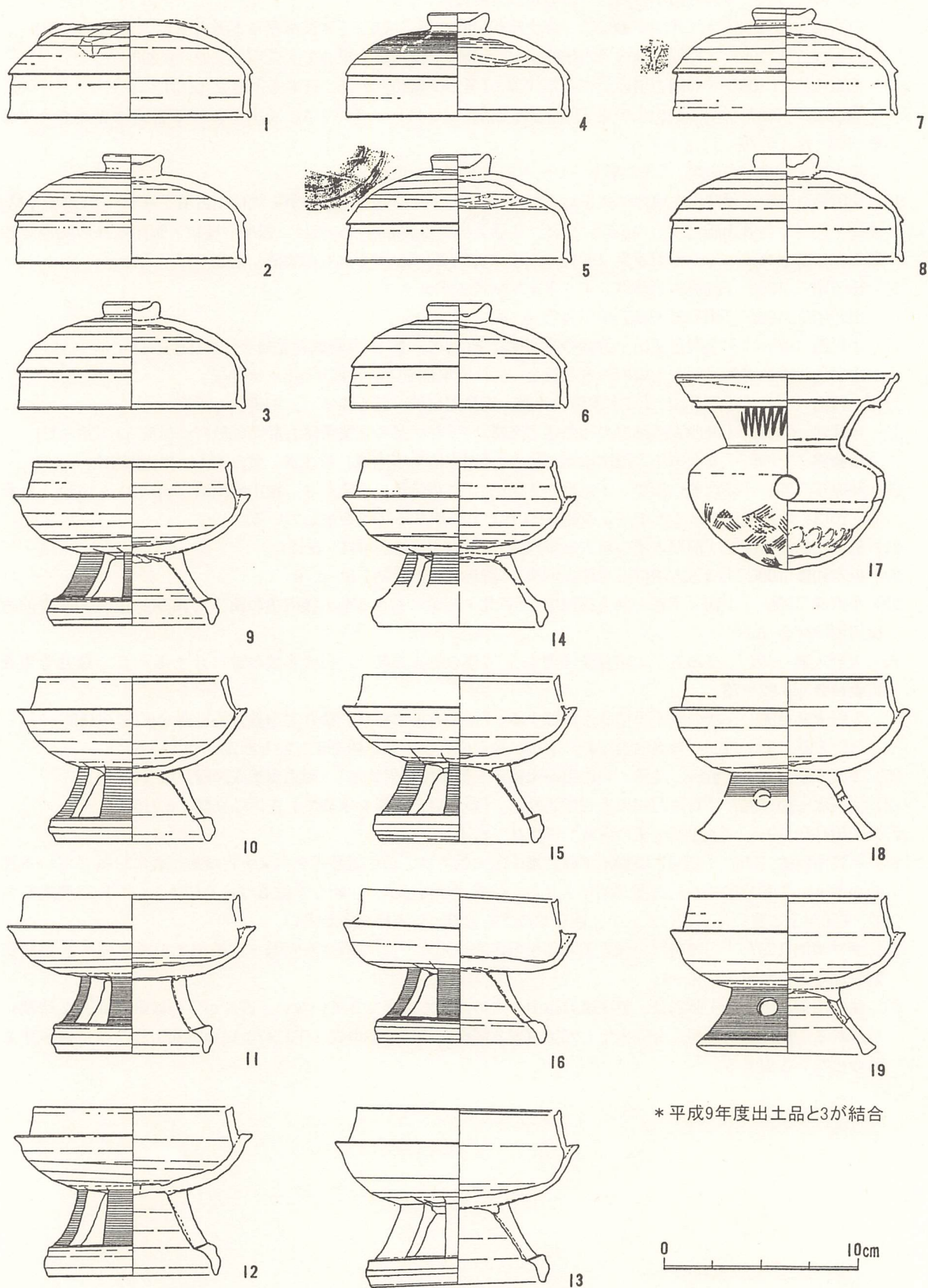
末筆ながら本資料を紹介するにあたり、市川康弘・飯塚光生氏をはじめ、お世話になった多くの方々に、厚く御礼申し上げます。

## 註

- 1) 稲荷山古墳は、埼玉県教育委員会 1980 『埼玉稲荷山古墳』。二子山古墳は、1987 『二子山古墳』 及び1992 『二子山古墳 瓦塚古墳』。將軍山古墳は、1997 『將軍山古墳』 (いずれも埼玉県教育委員会刊) に詳しい。埼玉古墳群に関連する刊行物は、拙稿 1995 「埼玉古墳群関連文献目録 I」 『調査研究報告』 第8号 埼玉県立さきたま資料館 を参照していただきたい。
- 2) 渡辺貞幸「辛亥銘鉄剣を出土した稲荷山古墳をめぐる」 『考古学研究』 99 考古学研究会 pp.27~34
- 3) 埼玉県教育委員会 1980 『埼玉稲荷山古墳』 p.29 において、採取された場所が括部東側として報告されているが、川鍋氏立会いのもと確認したところ括部西側であることが判明した。
- 4) 寛政年中(1789 ~1801) に編修し、文化3年(1806)に献上された「館林道見取絵図」に、埼玉古墳群付近の絵図があり古墳が描かれているが、現在知られている名称と異なることから照合することが出来ない。児玉幸多監修 1995 『館林道見取絵図』 東京美術
- 5) 鉄剣の銘文には、辛亥の年七月中に記したことを述べ、乎獲居臣の祖先である意富比埜から乎獲居臣までの八代の系譜を示し、代々大王の親衛隊長として仕えていたことと、乎獲居臣も獲加多支鹵大王が斯鬼宮にいたとき、天下を治めるのを補佐していたことから、その記念として立派な剣を作り、獲加多支鹵大王に仕えている由来を剣に刻むという内容が刻まれている。乎獲居臣が稲荷山古墳の被葬者なのかは確実ではない。
- 6) 古墳周辺の土取り時期は、土取り後に浅間A火山灰が堆積していることから、天明3年(1783)以前であり、削平面と火山灰層の間隔が数cmであることから、両者の時期が離れているとは思われない。天正18年(1590)石田三成が忍城水攻めのときに築造した堤(石田堤)や、稲荷山古墳の北を流れる旧忍川堤防の盛土に使用された可能性があるが、断定できない。
- 7) 須恵器の色調は、農林省農林水産技術会議事務局監修 1976 『新版標準土色帖』 日本色研事業株式会社の色名により表示した。
- 8) 金子真土 1980 「土器」 『埼玉稲荷山古墳』 埼玉県教育委員会 p.124
- 9) 田辺昭三 1981 『須恵器大成』 角川書店 p.45



- 10) 中村浩 1988 「須恵器の編年」『季刊考古学』第24号 雄山閣出版 p.39
- 11) 坂本和俊 1996 「埼玉古墳群と无耶志国造」『群馬考古学手帖』6 群馬県土器観会 p.70  
坂本俊夫 1987 「東国における古式須恵器研究の課題」『第8回 三県シンポジウム 東国における古式須恵器をめぐる諸問題-第I分冊-』千曲川水系古代文化研究所 p.464ではTK47型式としていた。
- 12) 安村俊史 1996 『高井田山古墳』 柏原市教育委員会 p.174
- 13) 白石太一郎 1985 「年代決定論(二)-弥生時代以降の年代決定」『岩波講座日本考古学』1 pp.230~231  
白石太一郎 1997 「有銘刀剣の考古学的検討」『新しい史料学を求めて』吉川弘文館 p.208
- 14) 都出比呂志 1982 「前期古墳の新古と年代論」『考古学雑誌』67-4 日本考古学会 p.121  
駒宮史朗 1987 「埼玉県出土の古式須恵器」『第8回三県シンポジウム 東国における古式須恵器をめぐる諸問題-第I分冊-』 p.144  
橋本博文「文字の登場」『考古学キーワード』有斐閣 p.103
- 15) 稲田晃 1969 「稲荷山古墳の年代をめぐる(上)(下)-岩戸山古墳から稲荷山古墳をみる-」『歴史手帖』第68・73号 名著出版(下)のp.53。なお、久居2号窯の製品については、器形や種類・製作技法の陶邑との類似が指摘されている。山沢義貴 1981 「三重の古代窯」『日本やきもの集成』近畿I 平凡社
- 16) 田辺昭三 1966 『陶邑古窯跡群』I 平安学園考古学クラブ  
田辺昭三 1981 『須恵器大成』角川書店 p.43
- 17) 中村浩 1978 「和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」『陶邑』III 大阪府教育委員会 pp.168~241  
中村浩 1977 『陶邑』 大阪府教育委員会 p.に実年代を入れた編年tableがある。
- 18) 中村浩 1984 「用語解説」『日本陶磁の源流-須恵器出現の謎を探る-』柏書房 p.237
- 19) 後藤建一 1989 「湖西古窯跡群の須恵器と窯構造」『静岡県窯業遺跡』静岡県教育委員会 pp.328~331  
後藤建一 1995 「湖西編年と他窯編年対比表」『須恵器集成図録』第3巻 東日本I 雄山閣出版 p.87
- 20) 藤原学 1991 「須恵器の編年 1 近畿 A畿内」『古墳時代の研究』6 雄山閣出版 pp.121~135、ただし、p.132の表ではI-4とI-5の間を500年とした異なる年代を示している。
- 21) 都出比呂志 1982 「前期古墳の新古と年代論」『考古学雑誌』67-4 p.121
- 22) 坂本和俊 1996 「埼玉古墳群と无耶志国造」『群馬考古学手帖』6 p.76
- 23) 小沢洋 1996 「上総・下総の前方後円墳」『東北・関東における前方後円墳の編年と画期』東北・関東前方後円墳研究会 p.52
- 24) 天野末喜 1994 「倭の五王の墳墓を推理する」『倭の五王の時代-巨大古墳の謎にせまる-』 藤井寺市教育委員会 pp.62~73  
天野末喜 1996 「倭の五王の墳墓を推理する」『倭の五王の時代』藤井寺市教育委員会 pp.137~158  
天野末喜 1996 (1994の講演会記録)では、稲荷山古墳の須恵器をTK23と断定されている。
- 25) 齊藤孝正 1995 「猿投、美濃、美濃須衛窯編年と他窯編年対比表」『須恵器集成図録』第3巻 p.86
- 26) 白石太一郎 1997 「有銘刀剣の考古学的検討」『新しい史料学を求めて』吉川弘文館 p.215
- 27) 山田邦和 1998 『須恵器生産の研究』学生社 p.16
- 28) 石野博信編 1995 『全国古墳編年集成』雄山閣出版では、須恵器型式を本文・古墳編年表に記載している部分がある。TK47型式を、西暦500年より古く位置づける(6人)、新しく位置づける(3人)、TK23型式を含めて500年上に置いている(1人)で、西日本に古く位置づける研究者が多い。
- 29) 酒井清治 1997 「古墳時代の須恵器-須恵器研究の視点-」『副葬された器-古墳出土の須恵器-』高崎市観音塚考古資料館 pp.40~41
- 30) 稲荷山古墳出土の土師器は、整理復原途中のため詳しく観察できていない。破片からの観察では、2時期に分かれる可能性があるが、今回出土した須恵器と同様に、TK23型式・TK47型式の時期より前後に逸脱するものはないと思える。



第4図 昭和12年採集須恵器（川鍋重寿氏所蔵）

番号	器種	法 量 cm	形 態 の 特 徴	成・整形の特徴	備 考
1	蓋	口 径 12.3 稜 径 12.5 器 高 4.9 口縁部高 2.2	口縁部は端部で外反気味に終る。端部は内傾する凹面をもつ。天井部の曲線は稜までなめらかに続く。	右回転ロクロ使用 天井部外面 $\frac{1}{2}$ を回転ヘラ削り調整	胎土・3mm前後の白色砂粒、0.5mm前後の黒色砂粒を含むも密 焼成・堅緻、自然釉 色調・灰色 口縁部の一部を欠く
2	高杯蓋	口 径 11.6 稜 径 11.9 器 高 5.6 口縁部高 2.2 つまみ径 3.2 つまみ高 1.0	口縁部は、僅かに内弯気味に終る。端部は内傾する凹面をもつ。稜は短かく鋭い。鈕は基部が太く、上面は凹面をなす。鈕端部は肥厚する。出土例中最も大形。	左回転ロクロ使用 天井部外面 $\frac{1}{2}$ を回転ヘラ削り調整	胎土・組成はNo.1同様だがやや粗い。 焼成・良好 色調・青灰褐色 ほぼ完形
3	"	口 径 11.5 稜 径 11.8 器 高 5.5 口縁部高 2.0 つまみ径 3.0 つまみ高 0.85	口縁部は、端部に向かって肥高しながら直立する。端部は内傾する凹面をもつ。稜は短かく鋭い。鈕は筒状で、上面に凹面をもつ。	左回転ロクロ使用 天井部外面 $\frac{1}{2}$ を回転ヘラ削り調整	胎土・組成はNo.1同様だがやや粗い。 焼成・良好 色調・淡灰褐色 $\frac{1}{4}$ から復原実測
4	"	口 径 11.4 稜 径 11.6 器 高 5.3 口縁部高 2.0 つまみ径 3.2 つまみ高 0.9	口縁部は端部に向かって肥厚しながら僅かに内弯する。端部は内傾する凹面をもつ。稜は短かく鋭い。鈕は筒状で、上面に凹面をもつ。	左回転ロクロ使用 天井部外面 $\frac{1}{2}$ を回転ヘラ削り調整。この削り痕はカキ目様の平行凹線となる。 内面中位に一部ナデツケ	胎土・組成はNo.1同様だがやや粗い。 焼成・良好 色調・淡青灰色 口縁部の $\frac{1}{2}$ を欠く。
5	"	口 径 11.5 稜 径 11.6 器 高 5.5 口縁部高 1.9 つまみ径 3.15 つまみ高 0.95	口縁部は端部に向かって肥厚しながら直立する。端部は内傾する凹面をもつ。稜は短かく鋭い。鈕は筒状で、上面に凹面をもつ。	左回転ロクロ使用 天井部外面 $\frac{1}{2}$ を回転ヘラ削り調整天井部内面中位にナデツケ。	胎土・組成はNo.1同様だがやや粗い。 焼成・良好（高杯重ね焼きの痕跡を残す） 色調・淡青灰色 口縁部は $\frac{1}{4}$ から復原実測
6	"	口 径 11.05 稜 径 11.2 器 高 5.35 口縁部高 2.1 つまみ径 3.4 つまみ高 0.95	口縁部は端部に向かって肥厚しながら直立する。端部は内傾する凹面をもつ。稜は短かく鋭い。鈕は筒状で、上面に凹面をもつ。出土例中最も小形。	左回転ロクロ使用 天井部外面 $\frac{1}{2}$ を回転ヘラ削り調整	胎土・組成はNo.1同様だがやや粗い。 焼成・良好（高杯重ね焼きの痕跡を残す） 色調・淡青灰色 $\frac{1}{4}$ から復原実測
7	"	口 径 11.5 稜 径 11.7 器 高 5.5 口縁部高 2.15 つまみ径 3.3 つまみ高 0.85	口縁部は、一定した器厚のまま端部に至る。端部は尖り、内傾する凹面をもつ。稜は短かく、やや甘い。鈕は扁平で、上面にゆるやかな凹面をもつ。	左回転ロクロ使用 天井部外面 $\frac{1}{2}$ を回転ヘラ削り調整稜内面には他でみられる強いしめつけがみられない。	胎土・組成はNo.1同様だがやや粗い。 焼成・良好 色調・淡灰褐色 ほぼ完形
8	"	口 径 11.9 稜 径 12.1 器 高 (4.65) 口縁部高 2.1	口縁部は、端部にむかって肥厚しながら直立する。端部は内傾する凹面をもつ。稜は短かく鋭い。	左回転ロクロ使用 天井部外面 $\frac{1}{2}$ を回転ヘラ削り調整	胎土・組成はNo.1同様だがやや粗い。 焼成・良好 色調・淡青灰色 $\frac{1}{4}$ から復原実測
9	高杯	口 径 10.0 受け部径 12.1 器 高 8.45 たちあがり高 1.7 脚 部 高 3.75 脚基部径 5.2 脚 底 径 8.1	杯部たちあがりは、直線的に内傾し、端部には内傾する凹面をもつ。受け部は、浅い凹面をもち、やや外上方にのびる。端部は鋭い。脚部はゆるやかに外反し、端部の肥厚部分は低く、厚い。長方形透を三方向、等間隔にあける。	左回転ロクロ使用 杯体部外面 $\frac{1}{2}$ を回転ヘラ削り調整 脚柱部外面にカキ目調整 脚内面にナデツケ	胎土・組成はNo.1同様だがやや粗い。 焼成・良好 色調・淡青灰色 杯部 $\frac{1}{2}$ を欠く。
10	高杯	口 径 9.5 受け部径 11.8 器 高 8.5 たちあがり高1.65 脚 部 高 3.8 脚基部径 5.2 脚 底 径 7.7	杯部たちあがりは直線的に内傾し、端部には内傾する凹面をもつ。受け部は浅い凹面をもち、やや外上方にのびる。端部は鋭い。脚部はゆるやかに外反し、端部の肥厚部分は低く、厚い。長方形透を三方向、等間隔にあける。	左回転ロクロ使用 杯体部外面 $\frac{1}{2}$ を回転ヘラ削り調整 脚柱部外面にカキ目調整	胎土・組成はNo.1同様で密 焼成・堅緻 脚部に自然釉 色調・晴灰色 杯部は $\frac{1}{4}$ からの復原実測

第2表 土器観察表(1)

番号	器種	法量 cm	形態の特徴	成・整形の特徴	備考
11	高杯	受け部径 12.7 器高 (6.6) 脚部高 4.0 脚基部径 5.4 脚底径 7.5	杯部が大きく、体部はゆるやかに内湾。受け部は浅い凹面をもち、やや外上方にのびる。端部は鋭い。脚部の外反はやや強く、端部の肥厚部分がやや高く、端部は直立して尖り気味。長方形透を三方向、等間隔にあげる。	左回転ロクロ使用 杯体部外面 $\frac{3}{4}$ を回転ヘラ削り調整 脚柱部外面にカキ目調整 脚接合部は、強いナデが一周し、杯切り離し痕は消されずに残る。	胎土・組成はNo.1同様だが、やや粗い。 焼成・良好 色調・淡青灰色 杯部は $\frac{1}{4}$ からの復原実測
12	"	口径 10.1 受け部径 12.2 器高 8.8 たちあがり高 1.45 脚部高 4.5 脚基部径 8.5 脚底径 5.6	杯部たちあがりは器壁が厚く一定し直線的に内傾する。端部には内傾する凹面をもつ。受け部は浅い凹面をもちほぼ水平にのびる。脚部はゆるやかに外反し、端部の肥厚部分は高く、器壁を減じながら、直立して尖る。長方形透を三方向、等間隔にあげる。	左回転ロクロ使用 杯体部外面 $\frac{3}{4}$ を回転ヘラ削り調整 脚柱部外面にカキ目調整 杯立ち上がり部のしめは弱く、一定している。	胎土・組成はNo.1同様だが、やや粗い。 焼成・良好 色調・青灰褐色 ほぼ完全
13	"	口径 10.4 受け部径 12.6 器高 9.2 たちあがり高 1.8 脚部高 4.25 脚基部径 5.6 脚底部 8.7	杯部たちあがりは僅かに外反気味。端部の内傾する凹面は段に近い様相を示す。受け部の凹面は浅く、ほぼ水平にのびる。脚部はゆるやかに外反し、端部の肥厚部分がやや高く、端部は直立して尖り気味。長方形透を三方向、等間隔にあげる。	左回転ロクロ使用 杯体部外面 $\frac{3}{4}$ を回転ヘラ削り調整 本高杯群中唯一カキ目調整がない。	胎土・組成はNo.1同様だが、やや粗い。 焼成・良好 良調・灰白色 $\frac{1}{4}$ を欠く。
14	"	口径 9.8 受け部径 12.0 器高 (6.4) たちあがり高 1.8 脚部高 (1.7) 脚基部径 5.4	杯部たちあがりは直線的に内傾し、端部には内傾する凹面をもつ。受け部には浅い凹面をもち、やや外上方にのびる。端部は鋭い。脚部はゆるやかに外反する。長方形透を三方向、等間隔にあげる。	左回転ロクロ使用 杯体部外面 $\frac{3}{4}$ を回転ヘラ削り調整 脚柱部外面にカキ目調整	胎土・組成はNo.1同様だが、やや粗い。 焼成・良好 色調・淡青灰色 $\frac{1}{4}$ からの復原実測
15	"	受け部径 12.1 器高 (7.1) 脚部高 4.0 脚基部径 5.4 脚底径 7.9	受け部は浅い凹面をもち、やや外上方にのびる。端部は鋭い。脚部はゆるやかに外反し、端部の肥厚部分は低く、厚い。長方形透を、三方向、等間隔にあげる。	左回転ロクロ使用 杯体部外面 $\frac{3}{4}$ を回転ヘラ削り調整 脚柱部外面にカキ目調整	胎土・組成はNo.1同様だが、やや粗い。 焼成・良好 色調・淡灰褐色 杯体部 $\frac{1}{4}$ を欠く。
16	"	受け部径 12.1 器高 (6.1) 脚部高 3.8 脚基部径 5.1 脚底径 8.3	受け部は浅い凹面をもち、僅かに外上方にのびる。端部は鋭い。杯部は内面に亀裂が走り、本来の杯部形はNo.9他同様のものと思われる。脚部はゆるやかに外反し、端部の肥厚部分は低く、厚い。長方形透を、三方向、等間隔にあげる。	左回転ロクロ使用 杯体部外面 $\frac{3}{4}$ を回転ヘラ削り調整 脚柱部外面にカキ目調整	胎土・組成はNo.1同様だが、やや粗い。 焼成・良好、杯部にへたりのがある。 色調・淡青灰色 杯体部は $\frac{1}{4}$ から復原実測
17	壺	口径 11.3 器高 10.1 頸部径 5.2 口縁部高 3.8 体部最大径 10.1	最大径は口縁部にある。体部の肩の張りは大きい、稜は弱く、なで肩であり、底部も僅かに尖り気味に終る。口縁部内面には明瞭な凹面をもつも端部は鋭さを欠く。口縁下に巡る凸線は鋭い。	左回転ロクロ使用 頸部には10本1単位の波状文 体部外面はタタキシめの後ナデツケ。体部内面には強い指頭圧痕を残す。タタキは体部中位以下のみ。	胎土・組成、密度ともにNo.1に酷似する。 焼成・堅緻 自然釉が厚くなる。 色調・暗灰色 口縁部は $\frac{1}{4}$ から復原実測
18	高杯	口径 10.4 受け部径 12.4 器高 (6.4) たちあがり高 1.6 脚部高 (1.5) 脚基部径 5.5	杯部たちあがりは、直線的に内傾し、端部は内傾する凹面をもつ。受け部は、本土器群中唯一凸面をなし、肥厚する。脚部はゆるやかに外反する。円形透は、三方向にあげられる。	左回転ロクロ使用 杯体部外面 $\frac{3}{4}$ を回転ヘラ削り調整 脚部外面にカキ目調整	胎土・No.1に比較して白色砂粒が少なく、やや粗い。 焼成・良好 色調・淡灰褐色 脚部は $\frac{1}{4}$ から復原実測
19	"	口径 10.1 受け部径 12.2 器高 8.1 たちあがり高 1.8 脚部高 3.3 脚基部径 5.6 脚底径 8.1	杯部たちあがりは、直線的に内傾し、端部は内傾する凹面をもつ。受け部は、ほぼ水平にのび中央に浅い凹線が巡る。脚部は、端部に向かって肥厚しながらゆるやかに外反し、端部にはゆるく幅広い凹面をもつ。円形透は、三方向、等間隔にあげられる。	左回転ロクロ使用 杯体部外面 $\frac{3}{4}$ を回転ヘラ削り調整 脚部外面のカキ目調整は端部5mm幅には及ばない。	胎土・No.18同様 焼成・良好 色調・淡灰褐色 脚部の $\frac{1}{4}$ を欠く。

第3表 土器観察表(2)